

淨土

號月一



法然上人鑽仰會發行

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十二年十二月廿日印刷 昭和二十三年一月一日發行

第十四卷 第一號

冬

雪のうちに

佛の御名を唱ふれば

つもれるつみそ

やかてきえぬる

——法然上人——

目次

扉……………(二)

浄土の存在について(四)……………(三)

中村辨康

静かなる死……………(五)

太田康道

絶対の平和……………(六)

矢内原 忠雄

隨 想

雪國の正月……………(八)

東 慈道

信仰相談……………(二)

中村辨康

童餅つき……………(四)

高井貞夫

編集後記……………(六)



淨土の存在について

(四)

中 村 辨 康

第四章 たましいと云うもの

一般に「魂魄」とか「靈魂」とか云うものがあるように思われて居る。然し魂魄とは支那思想であつて魂は陽であり魄は陰で、この陰陽の二元が人體の中にあるから人が生きて居るとして居る。隨て人が死ねば魂は天に歸えり魄は地にかえるのである。然し果して本當かどうかは分らない。

また「靈魂」と云うものを考えるが、之は何かしら不思議な存在であり、また生きて居る時には然程でもないが、死ねば色々な働きして、幸福をも又は災害をも我々に與えるものであるかの如く思われて居るが、これは明かに「アニミズム」の思想として未開人の間に行われて居る宗教觀念と大差ないものである。

然るに佛教ではそう云う存在的な「かたまり」を認めないのである。またたとい認めてもそれは凡夫たる者の

「迷い」であるとして居る。

即ち元來「心」は「物」の内容であり、その働きである。「物」はまた「心」の外形でありその容器である。故に佛教では「質碍」と云つて質があつて手なり目なりで觸れること(碍)の出来るものを「物」と云い、觸れることの出来ない即ち質碍なきものを「心」と云つて、一應の區別をつけては居るが、實は謂ゆる「物心不二」であつて「物」と「心」とは二にして一、一にして二なるものと云つて居る。

私達の精神作用は五官の集積に依つて段々積み重ねられた働きに過ぎない。この五官の作用がなくなれば、自然に精神作用も消滅するのである。

だからと云つて決して道徳的に責任がなくなると云うのではない。それは社會に影響し、子孫に影響し祖先をもけがし親類の心をも迷惑せしめ、然かも豎には未來永遠に亘り、横には周圍十方に亘つて毒風となり毒流となるものであるから、責任は實に重且つ大なるものがある

のである。随てそれは懺悔したとて決して消えるものではないのである。然し懺悔しなかつたら罪は益々大きくなるばかりである。若し「靈魂がないならば、自分の行為に責任がない」などと考えることこそ、最も迷妄な物的中心の考えであり、存在觀に依存した愚かなる考えである。

私達は何處までも淨土への往生を願求し行く生活でなくしてはならぬ。それは魂が往くのではない。私の現實が生きていることである。

金屬で出来て居る色々な部分が組立てられ組織付けられそれに一つの活動が與えられ、色々な動作や作品が産出されるように、人軀も亦た數多い細胞が色々な形態に組立てられて、骨となり肉となり筋となり髓となり皮となり脉となりして、複雑な五官の組織を作り、そしてそれら五官の作用が絶間なく働いて繰返し繰返し經驗することによつて、その蓄積が「我觀念」を構成して、之が刹那々の經驗に聯絡をつけて「一貫するもの」とする。それをまた存在觀念から「たましい」などと考えるに至る。然もそれは自らの經驗であると共に、周囲の他の多くの人々の經驗でもあり、且つ未開時代から先祖傳來して段々に發達せしめた經驗であり遺傳である爲に決して誤つた考えではなく眞實なるものと固く執心するのは決して無理ではないのである。

然しそれは眞相ではなくして「存在觀」を基礎としての迷想であるから、佛教では之を破ぶるべく努力した結果が八萬四千の法藏經論となつたのである。

さればこそ「破有」と云い「真空」と云うのである。若し「在る」と云うことを何うしても云いたいならば物

理的な意味に於て「假有」と云うか、又は宗教的意味に於て「妙有」と云うかであるが、それも畢竟は「存在觀」に妥協した考えでしかない。

私達は「生きる」と云うこと以外になにを好き好んのか「在る」と云う考えにへばりついて居なければならぬのであろうか。人間としては「生きる」こと以外に「ある」と云う考えなどは絶対にいらないのである。人生とは「人が生きる」ことであり「私が生きる」ことである。なまじ「たましい」があるなどと云うことを考えるから色々な混雜が生ずるのである。然かも何時でも「ある」と云うことに執着して居るから、それは恰度木に縛られた馬が走つて居ると思つて居ても實にはその廻りをぐるぐる廻つて居るのに過ぎないと同様である。さればこれを「輪廻」とも云い、「繫縛」とも云うのである。

これと同じように物的存在としての「淨土」を考えた。りまた「たましい」と云うかたまりを考えたりしたのでは「淨土」は「穢土」に均しくなり「たましい」はまた「往生」することが出来ずにまごつくばかりである。

「たましい」ではない。いきる「いのち」である。身體の存続する「いのち」ではない。眞實にいきる「いのち」である。一念即萬年の「いのち」である。一刹那がそのまま永遠に生きる「いのち」である。それを「たましい」と言わば云うべきでも、からだの何處かにひそんで居るかのような「たましい」ではいけないのである。私のほんとうに生きる「いのち」であり、價值であるものでなくしてはならない。それを假に一般に「靈」と云う言葉で言つて居るのみである。また「業」と云う觀念で云つて居るのみである。

法然上人は、順徳天皇の建暦元年十一月十七日に、歸洛の勅許をたまわり、二十日には、慈鎮和尚の御寄進された大谷禪房にはいられた。想えば承元元年の二月二十八日に専修念佛停止及び上人配流の宣旨が下り、三月十六日に愈々讃岐の配所におもむかれてから、五年ぶりのことである。上人の歸洛を喜び迎えた者は、千以上を数えたと伝えられているが、さすがに老齡の上人には、配所の生活のかげが濃く、なにか不安な色がただよっていた。

年が改まると、不安は姿を現わした。正月の二日から上人の食事は、さつぱりすすまなくなつた。

長い疲れが出たものらしく、病床にふせられた。しかし、病床の中でもお念佛だけはやめられなかつた。口をきくのも億劫なのに、舌と口とはたえずお念佛のために動いていた。

この間、法蓮房信空が上人の死期を察して、「各宗の祖師方にはすべて遺跡がありますが、上人はいまだにお寺をお建てになつたこと

はありません。御往生になつてからは、どこを御遺跡としたらよろしいでしょう」

と尋ねたが、上人は重い頭をあげて、きつぱりと答へられた。

「あとを一廟にしむれば遺法あまねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆえいかなとなれば、念佛の興行は愚老一期の勸化なり。されば念佛を修せん處は貴賤を論

厭うと雖も存するは人の身なり。惜しむと雖も、死するは人の命なり。何ぞ必ずしも處に依らんや。然のみならず念佛の興行、洛陽にして年久し。邊鄙に赴きて田夫野人を勸めんこと年來の本意なり。然れども時至らずして素志未だ果さず、今事の縁に依りて年來の本意を遂げんこと、頗る朝恩とも云うべし。此法の弘通は人は止めん

静かなる死

太田 康道

せず、海人漁人が苫屋までも皆これ予が遺跡なり」

法然上人らしい御遺言であつた配流の宣旨が下つた時も、嘆き悲しむ門弟を前に、

「流滴更に恨みとすべからず。其故は齡既に八旬にせまりぬ。假令師弟同じ都に住すとも娑婆の別離近きに有るべし。たとい山海を距つとも淨土の再會何ぞ疑わん。又

とすとも、法更に止るべからず。諸佛濟度の誓深く、冥衆護持の約懇なり。されば何ぞ世間の機嫌をばかりて、經釋の素志をかくすべき也」

とはげしい信念を吐露されている。配流も上人の烈々たる念佛生活の前には、邊鄙な讃岐に念佛を弘通せしめる、この上もない有難い機縁となり、朝恩となるのである。

る。死にあたつても、上人の胸にもえるものは、ただ念佛のみであつた。一廟など限られた動かないものがなんで必要であらう。念佛の唱えられるところこそ上人の遺跡である。無限の天地にみちているのである。なんという大きな心であらう。念佛生活につらぬかれた法然上人にして、はじめて言える生き生きした言葉である。

上人の病氣は日とともにすすんだ。幼少から上人にかしづいていた勢親房源智上人は、誰より胸をいためたが、死期の近ずいたことを知ると、せめて念佛生活の規範ともなるべきものを、もう一度上人から承つておきたい衝動にかられた。正月二十三日に意を決してそつとお願いした。上人は重病をものともせず、きわめてはつきりと最後のおきてしをされた。有名な一枚起請文がそれであるが、簡潔に力強く、念佛の眞髓が述べられたのである。かくして二十五日ついに日本精神史上に、きわめて大きな足跡をのこされて、聲高き稱名念佛を唱えつつ、静かに往生されたのである。時に八十歳の高齡であつた。



絶對の平和

東京大學教授

矢内原 忠雄

絶

對

の

平

和

—

現在、世界平和が確立していると思う人はあるまい。米國大統領始め世界の政治家が口をそろえて平和を語ること自體が平和の不安定を暗示している。國連という平和機構が組織されたが、その會議は平和にむかつて堅實な歩みをしているとは斷言できない。安全保障理事會では拒否權を約七十回行使しているが、その四十回はソ連代表の行使である。最近のロンドン外相會議は決裂し、ドイツは分割統治され、イタリ―、フランスは内亂の一步前にあり、中國の中共紛争は熾烈を加え、朝鮮は南北に寸斷され、世界は至る所に分裂の傾向が見える。平和を遮ぎる困難はいろいろの形で現れている。日本は領土を奪れたが、まとまつた國として存立していることは、全く幸福である。しかし、かくの如く世界平和が混亂していても、人類は平和について絶望しない。平和に進み得る確信は嚴として存している。平和は人類の希望であり理想である。古來人類は平和を幾度か希望し、その度に裏切られたが、それは空想ではなく、人類の意志であり希望であり、理想である。そこに平和論の不思議な性格がある。

それほど平和は人類の本質的欲求なのだ。大戰後に平和論の起るこ

とは當然であるが、今次の大戦ほど激しかつた戦争はなかつたにもかかわらず、今日に至るまで平和は遅々たる歩みである。勿論第一次世界大戰に比較すれば、世界が一つになり、國際連合は國際連盟よりも多數の國を網羅しているが、質的にかたく結びつけられているとは見えない。失望の原因でもありまた珍しいことでもある。ふりかえつて日本は敗戦後二ヶ年餘の間に果して復興したかどうか、バラツクでも家が建ち、電車が復舊し、學生もやや落着きをとれどした。しかしほんとに復興しているかと反省してみると、疑わざるを得ない部面が多い。即ちその第一はインフレの昂進である。インフレは早く止めなければ危険であるとは常識として誰にも分つてのことであるが、それが止まらずに次第に速度をましつつある。日銀券は二千五百億を突破したが、このまま進めば近く三千億になるであろうと、いわれている。生産の復興は政府の計畫どおりに進まない。日銀券増發の原因は財政難にあるといわれるが、これは政府のたてた物價體系が生産者に多額の補給金を必要とすることと官公吏の俸給引上げに因由し、その簡単な解決は不換紙幣の増發にあるからである。しかもこれは國家を

破滅に導き、國民を破産せしめるものである。もうける者は一部の投機者のみ、インフレは必死にいとめなければならぬ状況であるにもかかわらず、方策は知つていても行ふことができないでいる。昨年は戦後日本が復興しているという感じで各地で復興祭が行われたが、この事實を考えるとなんぞ知らん、それは死の舞踏であつたといつても過言ではない。現在の状況が進めば戦争的に破滅したように、復興途上に経済的に破滅することは必至である。

しかし生産力を回復し強固な基礎の上に經濟を再編成すればインフレをくい止めることは出来る。これを斷行すれば企業が整理され、行政も整理される。従つて没落の運命に出あう企業も出る。失業者も出る。この犠牲なくしては産業を健全な基礎の上に復興することは出来ない。このことは誰しも知つてゐることであるが、その大手術を政府も國民も斷行する勇氣がない。國民の勇氣の缺乏が戦争を導いた原因であるが、今また勇氣の缺乏がインフレを昂進せしめる原因である。

あの當時、日本を救う道は軍部を抑えることであり、それは分りきつた事實であつたが、革命の生ずることを恐れて軍部の計畫を默認した政治家の識見と勇氣の缺乏が、遂に日本を敗戦にひき入れたのであつた。これと同様の事實に今また直面してゐるのである。次に犠牲を拂わないでインフレを止める方法は失業者のぎせいを國民が負擔することである。完全な儲が稱えられてゐるが、これは米國でニューデイル政策の時に唱えられた理論で、疲弊した敗戦日本には贅澤な理論である。生産が衰え設備が撤去され六百萬の引揚者を持つ日本で、この理論を採用するとすれば、國民全體が生活程度を引下げて互に貧乏しな

ければならない。然るに國民はこの困難を分かちあう資格を持たない。ここにもインフレを克服出来ない原因がある。

ある學校の寮で食糧不足のため閉鎖しなければならなくなつた時、學生の部屋を調べると、數ヶ月の米を持つた者や數日の食糧を持つた者がたくさん出た。彼等は、こつそり一人でたいてたべていたのである。同じ學校の同じ寮の生活である。どうして出しあつて無い者に分かち與えることが出来ないのだろうか。自己防衛も一應の説明であるが解決とは違ふ。説明がうまく出来ることよりも先ず解決することである。このためには識見や勇氣以上に愛が何よりも必要である。これは現在の日本の縮圖である。これ以上に生活の引下げが出来るかという人があるかもしれない。なるほどそれは一般の常識である。然し、よく考えてみると大きな浪費が至る所にある。酒、煙草、いかがわしい出版物はその代表的なものである。男女同權の解釋から煙草の配給を男女均等にしたことは、皮相な解釋の下に、皮相な實行をした誤つた民主主義であるが、かかる間違ひを日本はいくらも犯してゐる。眞の民主主義は眞の自由を得ることであり、他を愛することである。乏しきを分かち合う國民の愛こそインフレを克服する道である。絶對の平和は信仰による個人の平安によらなければ實現しない。また困難な状況の下に國を復興するためには、しつかりした思想と信仰が必要である。そこから勇氣も愛もほとぼしり出る。要するにすべては我々の平和と自由の獲得にあるが、それはすべて神から來るものである。この信仰によつて與えられた自由と平和——心の自由と平和——これこそが世界の平和と日本の復興をもたらす唯一の證據である。特に戦敗國は信仰なくしては安心して生きてゆけないことを銘記すべきである。これによつてのみ勇氣と希望が與えられるものだからである。(文責在記者)

雪 國 の 正 月

東 慈 道

指おり數えて待つていた。

「つきたてのお餅をどつさりたべて、お母さんやおばあさんに、うんとこさ、しよつてきてあげるね。」

お餅の話が出るたびに、得意になつて、こんなことも話していた。しかし、歳末になると、例のごとく汽車は削減され、切符の入手は困難になつた。私の切符はようやく手に入れたが、子供の分までは、どうしても手が出ない。せつかくの楽しみをもぎとられた、淋しそうな子供をのこして、殺人的な汽車にひとり乗りこんだ。着いてみると、友人は案の定、子供を連れていない私を、挨拶もしないでいきなり責めた。「たくさん持つてゆけないんだから、連れてきて、腹一ぱい、たべさせてやればいいのに……。」

こう言われてみると、十二時間も立ち通しで、足のおきばもない苦しみに、連れて來なくてよかつた、と自ら慰めていた感情

私は、今年の正月を、生れてはじめて、

雪國で迎えた。三尺も四尺もの積雪は、はじめての経験で、電車をのりすてて、雪の中に足をふみ入れたとたんに、思つたより深く、あざやかにころがり、雪だらけになつたほどの私である。雪深い國の正月はそれだけ、感慨ふかいものがあつた。

終戦後の第一回目の正月は、やせさらばえたからだで、ヒリッピンから歸つて來たばかりだつたので、うやむやの中に迎えた

が、またほろにがい悔恨に變るのであつた。餅のない正月は、子供にはたえられな
いものであろう。私は今さらのように、の
こして來た子供の淋しそうな顔を、思ひ
かべた。と同時に友人の愛情がつよくつよ
く胸をうつた。

「やつぱりころんだんですね。」

昨年とついで來て、やつと雪になれた奥
さんが、私のオーバの雪を目ざとく見つ
けてころげるように笑つた。友人もようや
く氣ずいて笑つた。

「まだ序の口だよ。これから本格的につも
るんだからね。」

雪をはたいてくれて、茶の間に通したが
そこにはストーブが赤々と燃えていた。水
蒸氣の流れている硝子障子からは、雪の重
みに折れまがつている竹をとおして、銀世
界の眺望がひらけていた。いかにも、清潔
な展望である。目がいたくなるほどであ
る。

○
はじめて見る景色は、心をみづみづしく
するものであろうか。それとも神々しいま
でに純白な雪が、心を洗うのでもあろう
か。私の心は清く澄んできた。見るもの、
感ずるものが、すべて新鮮である。

大晦日には友人を助けて本堂のすす拂い
をした。寺に生れ寺に育ちながら、俗塵の
生活に埋れている私であるだけに、み佛の
臺座の塵をはらい、内陣をはき清めること
は、一そう有難く思われた。友人ははいた
あとの板の間に、窓下の雪をとつて、ばら
ばらとまきちらし、もう一度はいてくれ、
とたのんだ。はき集めた雪は、落ち着いた
塵をすつて、うすくろく汚れたが、板の間
はふきあげたように、美しく光つた。雪國
らしい掃除のしかたである。けがれた一年
の塵を、すつかりすいとつて、明日の元旦
が清らかに迎えられるように思つたのは、

私一人の感傷であらうか。

除夜の鐘をつくまでの夜の時間は、檀徒
におくるお札刷りにあてられた。虫のくつ
た古い板木に墨を塗つて刷り上げ、梵字の
朱印を捺するのであるが、私はこの古風な仕
事を手傳いながら、ほんとに今夜は大晦日
であると、心を新らたにした。古びた版本
の壯嚴さを傳えるのである。

百八の除夜の鐘をつき終るまでには、一
時間餘りもかかつた。友人は耳から首巻を
まきつけてオーバを着、ゴムの長靴をはい
て出かけた。冷えきつたからだを温めるた
めに、風呂は熱くたてられていた。子供た
ちは寒さにも負けず、数通りの銀杏の實を
升に入れて、あとからついていつた。ラヂ
オの除夜の鐘にいりまじつて、友人のつく
鐘の音が、いんいんとひびきはじめた。雪
の野空をわたるためか、それはひどく冴え
て聞えた。一年のけがれを洗い去る、清ら

かな響きをふくんでいた。私はストーブの火をみつめながら、古い年が去りゆくのを痛切に感じた。古きものに別れをつけ、新しい出発をことほぐ心が、しだいに強まっていた。私はじつとしておれなくて、オーバーをひつかけると、雪にころびながら鐘樓堂にかけつけた。

小雪の降りしきる夜だった。私は友人から鐘木のつり手を受けとつて、鐘をつきはじめた。ゴーンとつき出すたびに、私は人々の心を洗い清める宗教的聖者の氣持にひたつた。雪明りでかなり遠方まで望見できたが、銀白一色の中にねむっている家々からは、黄色い光りがもれている。私のつき出す除夜の鐘に、新らしい年を迎える純朴な村人は、どんなことを考えているだろうか。楽しかった年を、ふりかえっている人もあろう。悲しかった出来事を、そぞろに想い出している人もあろう。しかし除夜の鐘がつきすすめられるに従つて、鐘

の音とともに、一切の事件を忘却の彼方に追いやつてしまつていよう。ついていゝる私自身が一つき一つきに、過ぎゆく年の悲喜こもごもの出来事を、追いやつていゝのだ。すべては去つてゆく。一切を忘れて新らしい年を迎えるのだ。新鮮な心で、この年を迎えるのだ。新らしい門出だ。私はなにか新らしい幸福を興える救世主のような氣持になつて、鐘をつきつづけた。ますの銀杏の實は少なくなつてゆく。二、三人の人影が、眞白い雪の中で、ことさら黒く見えて通つていつた。氏神に初詣でした歸らしい。新らしい年がきたのだ。

雪はしんと降つていゝ。心のひきしまる思いをしながら、自の分つき出す鐘の音に耳かたむけながら、今年こそいい年が迎えられるよゝな氣がして來た。

二三時間もねたであらうか。暗い中で友

人はもう新年の勤行をはじめた。念佛の鉦の音が、凍つた空氣の中に、りんりんとひびいてくる。

私は、長い間忘れていた嚴やかな元日の朝を、おもい出した。大正大學に通つていた頃、駒込の寺にお世話になつていたが、その御住職はきわめて嚴格な老僧であつた。元日は朝四時頃起きて、自ら佛様にあげる初水を井戸からくんだ。いつの年か、新らしい女中がそれを知らずに、老僧より先に水をくんで、ひどく怒られたことがあつた。老僧がメ飾りのしてある小桶に水をくみあげたあとでなければ、顔も洗えないのである。私は老僧のあとから手桶をもつて、井戸についていつたものであるが、水をくんでいる間に、年の明けた、みづみづしい嚴肅な氣持につつまれるのであつた。きわめて清潔な感じであつた。そして、それ以後のすべての行事は、神聖に見え、新鮮に感じられ、身の改まるのを覺えた。

もう十數年昔のことである。その後、日本は戦争に突入し、私個人も寺をはなれた。俗塵生活に埋れ、或は戦争にかりたてられて、殺伐な戦塵生活をすごし、来る年も来る年も、日常生活の延長にすぎない、だらだらした新年を迎えてきた。舊い年とけじめのない正月ほど、素漠たるものはない。

私は、友人のとなえる稱名の聲を聞きながら、平和の年に迎えた厳肅な正月を、回想していた。鉦の音はやんだ。長い間のふしだらな正月生活が身についている自分にびつくりして、あわてて飛び起きた。顔を洗つて身を清め、本堂に静座した。舊い年はすぎ去り、新らしい年を迎えた喜びが、油然而湧いて來た。神聖な氣持になつて、心から經を誦し、念佛を稱えた。感謝の念佛でもあり、門出に際する決意の念佛でもあつた。長く見失つていたものを見出した喜びにも似て、心はひろびろとした。

寺内のお雑煮が終るか終らないうちに、もうお檀家の人たちが、お年賀に來た。一家の主人が先ずお寺に年頭の挨拶をするしきたりは、この土地の昔からの風習であるというが、友人はひとりひとりから、奥の座敷で年賀を受け、五種香とおふだと切り餅を、寺のお年玉として與えた。それから檀家の人々は、玄關にきられている大きないろりをとりかこんで、寺の御馳走とお酒で、新年の酒宴をはじめるのであつた。長い人は朝から夕方までいて、のんびりと雑談をかわしながら、酒をくみかわした。彼等の一年は、お寺から始まるのである。悲しみも、喜びも、お寺に結びついていのである。佛教を日常生活の中に、しつかりとりいれている彼等が、うらやましくも思われたが、寺に育ちながら、佛教の教えとおよそ縁どおい生活をしている自分が、悲しくも考えられた。

○ 佛教繁昌の土地の正月を、はじめて経験

して、私は反省することが多かつた。生活の垢のごとく、日常生活の中に染みこんでこそ、佛教ははじめて人生の糧となるのである。それにしても、かかる風習をうみつけた先師の偉大さを、つくづく想う。東京にいと、佛教の無力をしみじみ感ずるが田舎に來ると、しつかりと生活に結びついた佛教の根強さを見るものである。しかし、この正月ほどにそれを心強く感じたことはない。佛教は、まだまだ日本人の中に強い根をはつていゝる。今年こそ、佛教興隆のために挺身したいと考えながら、檀家の人々の話を聞いていた。夕暮れまでには檀家の人は一人のこらず、年賀に來た。

大晦日の夜から降つていた雪はやんだ。純白の雪におおわれた山野が、いかにも新鮮に清潔に見える。冷たい風さえ清らかである。年の始めにふさわしい景観である。そして私の心も、十年來この方、はじめて正月らしいみづみづしさである。今年こそほんとに意義ある年をおくりたい。

信仰相談

信仰上の悩みや佛教についての疑惑にお答えします

擔當 中村 辨 康

一燈園生活は眞の宗教生活か

(問)

誌上での先生の質疑應答を再讀して居るものであ

と思つては惱んで居りました。と云うのは七十に餘る老母になげきをかけるのは人の子として如何にしても相済まぬ。親一人子一人で

を繰返し繰返し讀んだのでした。そして私は次のように思つたのでした。私はお蔭様で念佛の信仰に

でなければ本當に自分を捨て切れ

仰

ります。就きましては西田天香さんの一燈園生活につき、先生の御考えをお洩し願います。考えよう

に依つては、是こそ眞の宗教生活のようにはありますが如何でしょう

か。無學の私にはその判斷に苦しみます。是非御解答をおのせ下さいまし。(埼玉・熊谷・一愛讀者)

うか明日は行こうかと毎日々々行

談

(答)

一燈園主西田さんの「懺悔の生活」と云う本が出

ましたとき、私も毎日々々涙を流しつ

したが、母親への恩愛のきづなだけはどうしてもたち切れませんでした。そんな譯で「懺悔の生活」

に「宣光社」と云うのがあつて、

たものでした。そして毎日のように「寺を捨てて一燈園へ行こう」

した。そんな譯で「懺悔の生活」

に不徹底があるのである。一切の所有物を捨てるのが本當だ。それ

居ることが明らかになりました。

そして何の事業か知らぬが生産事業をやつて、金儲けをして居られる。それは利己の爲でなく社會の爲かも知れないが、凡そ一燈園とは正反對な行き方であります。おまけに御自身は妻君と一緒に或る富豪の家に寄宿して何の心配もなくやつて居られる。そして請待にまかせて諸所へ講演に歩かれる。姿こそ紺木綿の一燈園服を着て居られるが十人以上も供をつれてゾロゾロと歩き廻つて居るのは少しおかしいと思ひました。私の處にも一度見えました。とにかく大勢ゾロゾロついて歩く（托鉢と稱して其處の便所の掃除をするのですが、それもきれいになつて居る客用便所だけでした）そして下足も取つて呉れますが、要するにお大名行列です。それで私は趣旨は兎に角として、そうした事實にはあきたらぬものを發見して、自分は寺を捨てなくてもよいと考へ初めました。預り物なのだ、一切は預り物なのだ、このからだも、この色々な諸道具も、否な妻子までも悉くが預り物なのだ、預り物なるが故に大切にすればよいのだと

考へ初めました。そしてもう一燈園などへ行くと必要はないと思ひました。一燈園は一つの關門にすぎない。一切は預り物だと云う觀念を興えるための一關所に過ぎない。この關所を通りすぎれば、また再び一旦捨てたものをまた拾ひ集めて保管し運用して居る。無一物中無盡藏などの標榜は表看板に過ぎない。だからわざわざたつた一人の母親になげきを見せて一燈園へ走る必要はなかつたのでし

念佛の心理狀態は？

(問)

念佛申すのに、人によつて色々異りがありましよう。例えば親鸞聖人のように一よき人の教えを素直に信じて「申す人もありましようし、また色々宗教をこねくり廻した結果念佛にはいつた人もありましようし、或はまた先祖傳來のお宗旨だから念佛するのが當然だと思つて何の穿索もなく念佛して居る人もありましようし、またお寺に生れたお方のようにお職掌柄お念佛申して居る人もありましようし、その境遇と事情とで異りがあるかと存じます。その念佛申す信仰の心理狀態は何う云うのが正しいのでし

た。私は既に一燈園へ行つたと同じ心境に達して居るのです。何もそんな形式に捉われることはないと思つたのでした。そして一燈園には關心を持たなくなりまし。一燈園も一つの宗教生活でし。然しそれは唯一のものではないと思つたからです。

いくらあつても差支えないと存じます。それは現代人はなまじ色々な科學や哲學を學んだ爲に「往生とは何ぞや」とか「極樂淨土とは何ぞや」とか「何故に念佛すれば往生可能なりや」などと云う疑問が出て來ますので、それを一應解決しなければならなくなつて居るからです。この解決が出來て居れば何んなに理屈っぽい文化人も、この解決を裏付けとして上掲の一枚起請文の文句通りの心得で念佛申すことが出來ると存じます。

ようか、お質ねいたします。つまり念佛申す時の心持はどんな狀態なのでし。ようかお教え下さい。

(新潟・南蒲原・津川・渡邊生)

(答)

一寸むづかしい御質問で念佛は萬人普益と云つて何んな人にも通ずるのであり人を選びをしませんからどんな人でも一枚起請文の「唯だ往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申して疑いなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の子細候」わづと云う心得でよろしい譯です。其故素直にそう信じ取つて念佛申す心を最低の基準としてこの基準にはずれない研究ならば

また寺に生れて職責上念佛を約束せられ居る人であつても、求道心のある限り念佛さえ忘れなければ、法然上人のお言葉にもあるように、おのづから三業純熟して三心發得するから一枚起請文の文句通りの心持になれると思ひます。また南無阿彌陀佛の「南無」は「まかせ切る」氣持でありますから、如來様にすべてをおまかせするところで「南無阿彌陀佛」々々々と申せばよいのです。然し中々そう口で云うようにはなれないから何遍も何遍も念佛をしつづけまかせ切る氣持になり得るよう一心に心掛けて頂きたいのです。それ以外色々ご心配にならぬのがよろしいかと存じます。



話童

お

餅

高井貞夫

あたたかい秋の陽をうけて、キヤツキヤツと、猿がとびまわつていきます。白い歯をむきだしたり、まつ赤なお尻を金網にくつつけたりする猿もいます。さくの前は、子供で一ぱいです。おかしいかつこうにひきつけられて、はなれることができないのです。進駐軍の兵隊さんが、おもしろそうに、猿をからかいはじめました。猛も、子供の中にまじつて、じつと眺めていました。

一とう奥にいた大きな猿が、するすると金網に近ずいたかと思うと長い手をすばやく出して、進駐軍の兵隊さんの帽子をとりました。一瞬の出来ごとでした。子供たちはあつけにとられました。けれども、兵隊さんは平氣です。相變らずにこにこ笑つて、すこしもおどろきません。猛は思わず兵隊さんの顔を見つめました。猿は帽子を珍らしそうにいじりまわしています。

「ハロー」

兵隊さんが、とつぜん叫びました。右手にはビスケットをもつています。猿はしばらく見ていましたが、兵隊さんが、しきりに口笛をふいて、ビスケットを見せびらかすので、だんだん金網に近ずいてきました。

「ハロー、ハロー、マンキイ」

兵隊さんは笑いながら、ビスケットをさし出しました。猿は目玉をむいて、ビスケットをにらめていましたが、むりにとろうとして、帽子を金網のそとにとりおとしました。帽子は兵隊さんの頭に、またちよこなんとをつかりました。子供たちはお喜びです。猛は感心して帽子を見あげました。猿はなんでもなかつたように、ビスケットをむしやむしやたべています。たべることに夢中です。猛はおもわずふきだしました。弟の優が、たべものにかじりつく時の様子に、そつくりだつたからです。

兵隊さんは、煙草のすいがらをすてて立ち去りました。猿はすいがらをひろつて、ふかしはじめました。とても氣どつたかつこうです。「生意氣だなあ。」

誰かがそう言いますと、みんな顔見あわせて、どつと笑いました。小猿たちが、その笑い聲におどろいて、上り木のでつべんにかけて上りました。

兵隊さんがいなくなつたので、なんだか淋しくなりました。一人へり二人へり、いつのまにか少くなつた子供たちの肩に、太陽がかけり

はじめました。猛は歸りかけました。すると、猛と同じ年ごろの子供が、泣き出しそうな顔をして、さくのまわりをうろうろしています。誰かを探しているらしいのです。落ちつきがなくて、おろおろしています。猛は氣の毒になつて、言葉をかけました。

「どうしたの？」

その子供は、猛の顔を見ていましたが、急にわつと泣き出しました。

「どうしたの。お父さんか、お母さんを見うしなつたの？」

泣きやめないで、こくりとうなずきました。

「泣いてたんじや、わかんない。おうちはどこ？」

「と、とおいんだ。おらのうちはとおいんだ。」

これだけ言うと、また一そうはげしく泣きだしました。田舎の子供です。猛は可哀そうになりました。人だかりを恐れて、木陰のベンチにつれてゆきました。

「とおいつて、どこなの。」

「富山ぢや。」

「でも、東京にとまつているんだらう？」

「今夜、上野驛から歸るんじや。」

やつと、その子供はおちついてきました。よく見ると、胸の所に住所と氏名をかいた白いきれが、ぬいつけてあります。山田清と書いてあります。

「汽車が出るまで時間があるんで、動物園に來ただけんど、猿があんまりおもしろうて、見とれているうちに、はぐれてしもうた。」

清君は、また泣き出しそうになりました。

「大丈夫だよ。僕がさがしてあげるから。」

猛は清君をひきたてながら、ベンチをたちました。動物園の中をひとまわりしました。日暮れちかいので、人はまばらでしたが、清君のお父さんは見えませんでした。

「どうしようなあ。」

清君は心細くなつて、猛の顔を淋しく見つめました。

「大丈夫だよ。驛に行けば、きつと會えるよ。」

猛は清君の手をひいて、動物園を出ました。

「清！ この間ぬけめが。」

とつぜん、大きな聲をあびせられて、猛はびつくりしました。清君はわつと泣きだしました。お父さんが門の所にいられたのです。

「えらく心配したぞ。東京には悪い人がたくさんいるので、さらわれたんじやないかと思うての。」

お父さんの目にも涙がひかっています。清君はお父さんにだきついて、しばらく泣きじやくつていましたが、涙をふきもしないで、お父さんに言いました。

「東京の人は親切だぞ。この人が一しよになつてさがしてくれたんだぞ。」

二人は、猛には分らない田舎の言葉で、しきりに話していましたが、お父さんが猛のそばに來て、ベコリと頭をさげました。

「ほんとに有難うござんした。あなたがいなければ、浮浪兒になるところでした。ほんとに有難うござんした。」

なんども、なんども頭をさげるので、猛ははずかしくなりました。清君はすっかり元氣になりました。三人そろつて、公園を通りぬけ、驛まで行きました。

「では元氣でね。」

猛が別れようとする、清君とお父さんが、しつかり猛の手を握りました。

「坊つちやん、お禮をしたいんじやが、なにが一ばん不自由ですか。」

お父さんがそう言うと、清君が横から、

「わかつてるじやないか、東京の人はお米に一ばん困つてるよね。」と猛の顔をのぞきこみました。猛はどう答えていいか分りません。

「あたりまえのことをしたまでです。お禮なんかありません。」

猛は走り去ろうとしました。

「坊つちやん、正月がくるんじやが、お餅はきらいかね。」

「とても好きだよ。」

お父さんはにこにこ笑つています。

「ではね、このおじさんが、正月のお餅を、しよつてきてあげるちや。」

「おらがしよつてくるちや。」

猛は、その後、このふたりのこ

とは忘れていました。正月が近づいて來ましたが、東京ではお餅もつけません。お餅がたべたいなあとは思つていますが、それをいうと、お父さんやお母さんが心配するので、だまつていました。

三十日の夕方でした。

「ごめんなさい。川田猛さんのうちは、こちらですかね。」

猛が玄關をあけると、あの富山のおじさんが、にこにこ笑つて、たつています。

「先日は有難うござんした。お禮のために、約束の餅をもつてきましたちや。いえ、いえ、わざわざござんせぬ。東京の親戚に用がありましたもんね。」

猛はびつくりしました。

「清も元氣でありますちや。猛さんにせひしよつてくと申しておりますが、汽車がこむもんでね。」

田舎の人のすなおな氣持が、ひどく胸をうちました。約束のかたいのおどろきました。

編集後記

◇正月號をお送りします。矢内原教授の論説は、クリスチャンではありますが、宗教以外に敗戦日本を起ちあがらせる道のない事を主張したものです。愛讀を願います。◇別掲廣告の如く中村先生の著を公刊します。續いて信仰書を續刊する豫定です。御期待下さい。

新刊豫告

中村辨康著(菊半藏)

法然上人とその信仰

定價二十圓の豫定

三月下旬に發賣の豫定ですが分り易く法然上人の傳記とその教えを説いたものです。

發行所 法然上人鑽仰會

江上秀靜文 B5大判三十
鈴木壽雄畫 ツト六色刷

法然上人繪物語

定價六十圓千留八圓

戦後をはじめて出た最も美しい繪本です。本會でもお取次します。

東京都中央区京橋一ノ二
發行所 法然上人繪物語刊行會

「浄土」 一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿二年十二月二十日印刷
昭和廿三年一月一日發行
(定價五圓)

東京都港区芝公園浄土宗務所
編輯兼 中村 辨康
發行人

東京都千代田區神田保町三ノ十
印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田保町三ノ十
印刷所 共立社印刷所
配給元

東京都千代田區榮路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京都港区芝公園浄土宗務所
振替 東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費 金六十六圓
一ヶ年

(送料六圓を含む)
振替振込みはすべて一圓五十銭増のこと

定價金 五圓(送料)

浄土 第十四卷 第一號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十二年十二月廿日印刷 昭和二十三年一月一日發行